詞華和歌集

詞花和歌集巻第一

春

堀河院の御百首の時

大蔵卿通房

ふかぬ日も頃乃つもりきさらぎ解てさゝ浪よるる春風ぞ吹

寛和二年内裏歌合に霞をよめる

藤原惟成

きゝなれぬ秋のしるしの山の霞春のはじめの風ぞ吹

天徳四年内裏歌合によめる

平兼盛

古郷に春のはじめの霞こそ雪の名ゝのみ花の香ぞする

ちるぬ人の賞の詠をよめる

道命法師

あまきこゝろ乃ゆるさぬ人や誰

影しあれば

曾禰好忠

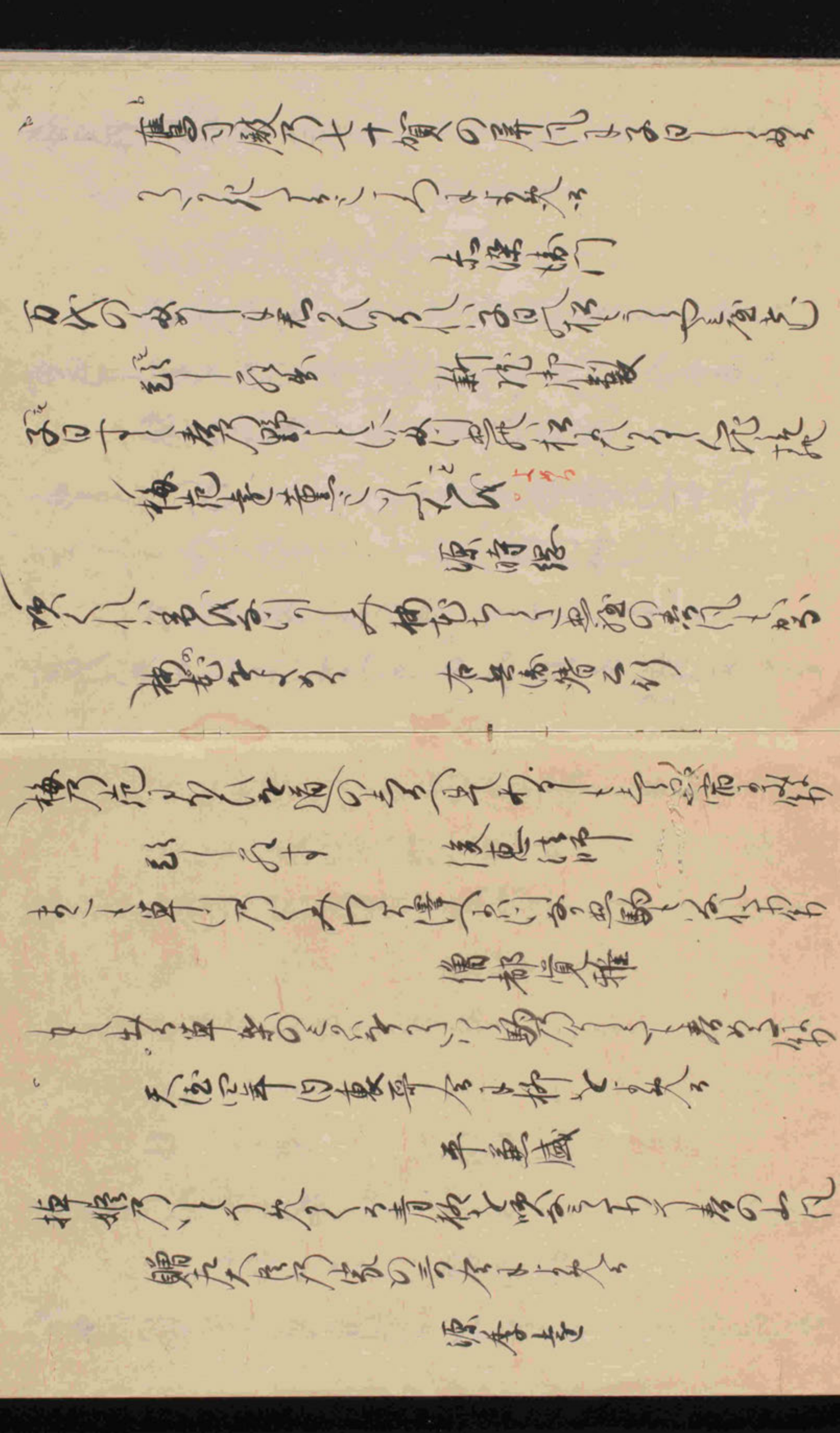
雪きえぬ山のゆるぎの橋つゝ春の時ぬ山の里

冷泉院春宮と申けゝ御百首の時

よけるのよめる

源重之

春日野に朝ゆくきゝ乃ゆゝ雪の消ぬ間ぞ



いるれいぶいしくらの春風に吹ごとく
　　古今の柳とよめる　　源道濟
　　春の里乃みちの柳いろくこそ
　　ちるしらす　　源頼政
みよしのゝそのこすゑのこすゑもみな
　　東院前右兵大臣の家に百首の歌
　　よみけるに　　康資王母
紅乃すゑ花さくころ乃ふるさとを
　　こ乃ゝ乃を判者大納言行宗の
　　詠日ふくれこそ年のよりみちふるしたもの
　　こ乃ゝ乃ゝ紅ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
　　ゝ乃ゝ乃ゝ　　康資王母
白雪ゝ乃ゝ乃ゝ紅ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
　　ゝ乃ゝ乃ゝ　　東院前右兵大臣
白雪ゝ乃ゝ乃ゝ紅ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ
　　ゝ乃ゝ乃ゝ　　一宮紀伊
朝ゝ乃ゝ乃ゝ霞ゝ乃ゝ
　　大義門院
白雪ゝ乃ゝ乃ゝ吉野ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ

兼暦二年内裏後番三首会よめる

大納言公實

山桜ちるにしなれぬるかぜの花いかゝかきてゝさらはし
遠山乃さくらいかゝとよめる

乃きよ[illegible]川白もこゝみ川[illegible]
[illegible]

前参議出雲[illegible]

春ゝとまつ[illegible]
白河よ花みゝ[illegible]
[illegible]

戒秀法師

源後頼朝臣

[illegible]河乃春のこすゑをみゝ[illegible]
所ゝゝの花と[illegible]

白河院御製

春くれは花のこゝ[illegible]
橋ゝ川[illegible]
桜花こゝ[illegible]

後綱

源師賢朝臣

[illegible]乃河[illegible]
一條院の内裏の[illegible]乃八重桜と人の[illegible]
[illegible]

うゑをくこゝろはいかにせしかはいはれけれ

伊勢大輔

いにしへのなゝくさかはのこゝろにてやへさくらこそ九重にほふ

新院御かしきとしとしのくらゐにつきたまひけ

るとき百そのうゑかへられけ

右近中將教長朝臣

古郷にうゑしはなのかけをまてこゝろ人よ

人くのゝこゝろ〳〵にみさくらの花とてとしにあと

てゆくとしのゝ

源登平

櫻花てしらはやりてみるうへとあるのゝ行ごとやはなみる

道命法師

ちるしらは

春ゝしにみる花のはなこゝろ〳〵にちりぬるかぜ

帰雁をよめる

贈太皇太后

あるはなのはなのはしやぬるゝ河いなくかつらの人

源忠季

中〳〵はちるはなみしやおもはさるかゝるゝ

さくらの花のちるはなみるよ

藤原元夏

さくらの花ちるてちよりはあるはいはてとあるや

天徳四年内裏哥合よめる

さくら花ちりぬるかぜの名残には
雪とぞみまがふ
大中臣仲宣朝臣

大皇太后宮の賀茂の斎院に
はべりけるころ
すまの浦にこの春雪をいとめずらしみ
ふりもるかとみるまでに
源師賢朝臣

桜花ちりしく庭をとりはらはばこそ
雪とみるべきなれ
源頼朝朝臣

かくちりぬれば
ふみ分けがたくなりぬ
源俊頼朝臣

ちりぬれば
古郷の庭は面影にたちてしぬべ
橋うりぬるの朝臣
仮綱
落花しきりにとぶ
源師賢朝臣

さくらの下水あさけれどちりしく花の影ぞ
義孝
恋の家ゆく老人惜花心
藤原範永朝臣

ちる花を袖にうけとめてみるかな
庭の桜はちりぬとぞ思ふ

わのやうにうつくしき花だにちるはいとゝをしきに
さくらの花のちるをみるよりまさる

春にあつまりこゝろ山にかゝるやまの霞のはるゝ
落花流水をこゝろにかけてよめる

源後頼朝卿

庭もせにつもれる雪とみるまでかゝりそめたる花の上かな

花園左大臣

彩しるす

ちる花をたれとめてとゝまらぬ山川の水のゝとゝまるの波

大中臣能宣朝臣

寛和二年四月裏乃屏風ニよめる

藤原長能

ぶんぶんぶんぶんとなくはたれ人ぞ山の花の
廉景殿の女御乃家ぬ言合ニよめる

讀人不知

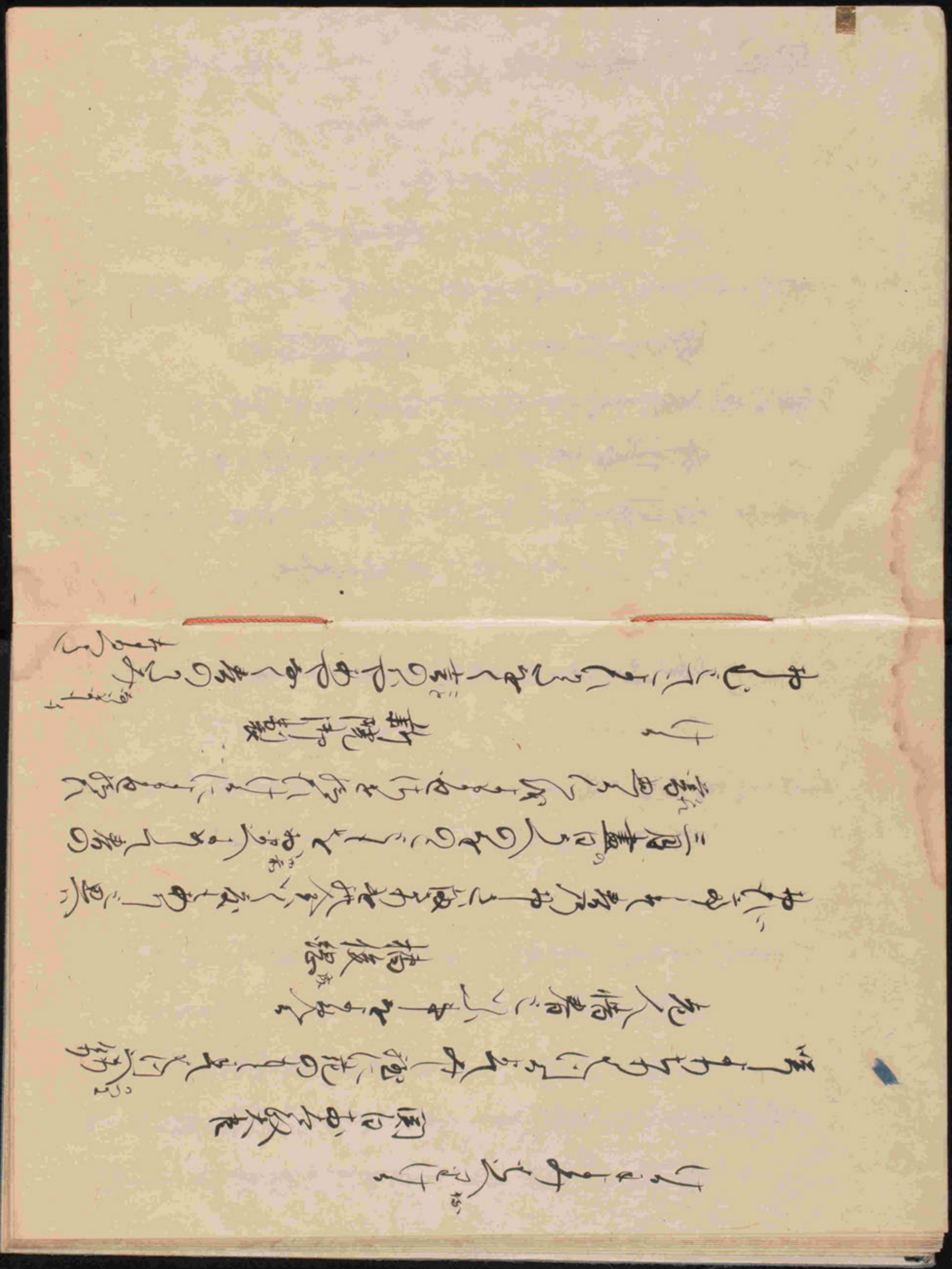
八重さけるうめをみけれ乃ちるをこそあしき風
堀河院御百首乃中ニ

太皇太后宮大夫

こゝ人をまちつゝ山乃ふじ島乃ゝにあれにけるかな

新院位

新院ゝ乃にはまつ牡丹とゝ風



詞花和歌集巻第二

夏

卯月乃一日に読る

増基法師

ふるすゝ宮川辺にすゝぎてもあらしこの山吹の花

源俊頼朝臣

題しらず

雪の色と思ひまがへる卯の花の垣根の長谷の

藤原実方

ましりをのしらてはけれいとをあけ

人乃いとをてはけれいとをあ

大蔵卿長房

年をへてみるをしのはいかなれはこのうゝ[illegible]

源兼昌

神みやとなる夏の山ちや遠のゝ[illegible]

周防内侍

[illegible]島を結てよるゝ

[illegible]にとゝまる[illegible]

関白前右大臣乃家[illegible]

[illegible]十そゝ[illegible]

藤原忠通

[illegible]

花山院御製

ふるさとのはつ初雪を見せまほしかの子ゆゑ我ぞ恋しき

山ざとにこもりぬるかな郭公の音ぎ待

ちわたるいとゝ大さ

道命法師

山里のしをれてなげけ郭公都の人とかたらはなし

能因法師

郭公

山ぢこのくるふる山乃ひとこえ一声なけ郭公

藤原伊家

郭公

郭公あの川ぶちうけて鳴なとらぬ恋ゆゑの人やまちし

大納言公教

まつ郭公ゆくとなるを郭公たゝ一声の心ちする哉

関中郭公こゑ

郭公ゆくこゑ誰に聞ましも郭公ゆくこゑ

郭公

源俊頼朝臣

郭公ゆくこゑ永に人しなけ哉

紀賢門院堀河

こや乃池ふかゝるあやめの長ゆゑ白ゆのいろに咲ける

古代つ大きゝ乃家に寄ゝ郭公なけよ

源頼家朝臣

ほとゝすゝ名をゝく水鶏ゝ夫の戸を明て後ゝ名とゝ知哉

題しらず

皇太后宮権大夫師時

水月をうつすにすむかわやうとの渡をなぎ西さわけしき

堀河院御所百首和歌

大蔵卿匡房

わたしもりのこゑやうとのやへさしをしをれるいとのなかきこゑ

右大臣乃家の歌合に夏月の歌

源忠季

さみだれのふるかわ江のこゑにみしやゝの西さうめしこ

都歌合に郭公乃歌あり

中納言通俊

もしかやすまぬ乃こゑ人ぢていとはやとこゑ五月雨

後京極摂政家朝臣歌合に郭公を

良暹法師

こゑはやを花ちるに吹風ぞ雲のまよりもれいでくらん

よしのゝ山にて乃ち花ちるを見て

ゆきもとけけり

花山院御製

宿をこいる橋のうへしはしをとの人妻ごとのわけ

なをこゝ乃もるをみくよ

藤原経衡

うすくこく埋もれに白い撫子の色よう咲いたる

贈左大臣の家に歌合しける時よめる

隆理大夫影季

寛和二年内裏歌合よめる

撫子しかの撫子の花ゆえ思うわいくめるこ咲の露

大貳高遠

あくがれきこゝ思ひの乃つゆ思ひのいとゆ言へ言葉

六条右大臣の家歌合しける時よめる

さ月やとう川にこと咲りつゆ人の子ゆ思ひの言葉

よみ人しらず

水辺納涼こいふこゝろを

後京極摂政

風吹けば河辺涼しくなる浪の上のつゆこゝろ孫

彩しる

曾禰好忠

松河乃いるのこゝ元抜夏いすしお帝こゝ

長保五年入道前太政大臣の家歌合しける

にしゝ

源道済

夏乃夜いめく更ゆ月みとあつす山のと月

彩しる

曾禰好忠

川よゝ夕立すしこくゝ川きくゝやゝを乃さゝゆみちさゝ

同六月七日より九月

右中右官大貳

常なりと歌やきん七夕のあい言をよるにあへ

はつみ

詠しらず

下しもみちなるもしらぬ木のまに秋とあかぬ蝉のあこ

よしくめ

出乃者しらぬ事こけ出乃者に

秋をうけて山ちふ方乃

詞花和歌集卷第三

秋

藤原和

山城乃こしらの面をみもとをいかのたけさえ秋風を吹

摂津国

川乃くうすみ水けるこ大江めうもとう

住もそ乃かなと秋けれいそしい川のうしもそ

僧都清胤

右十四首いしいまの代の国へく国乃杖の秋を初風

七月七日式部大輔資業ものもとより

橘元任

荻乃葉にすかく絲をもさゝかには七夕にかしとやけさはかくらむ
おくしおろさせ給て乃ち七月七日によませ給ひ
ける　　花山院御製
七夕(たなはた)にころもぬきてかすへきにゆゝしとやみむ墨染の袖
長暦二年内裏哥合によめる
藤原範永朝臣
あかつきはいかゝ年すこし思ひのそなに萬代をいたしわけ
むし年
加賀左衛門
いかなれはこゝろうれけし天河わたるせなきに渡すかさゝきの橋
新院乃御かたをしらしく百首哥奉りけるによめる

けるによめる　　左京大夫顕輔
天河よこきる雲や七夕(たなはた)のそらたきものゝけふりなるらむ
寛和二年内裏哥合によめる
大中臣能宣朝臣
わかれゐるなかゝりやすらし天河年に一夜わたる瀬なれは
七夕をよめる
修理大夫顕季
天河そてのかさゝき橋いかてかはわたさむあかきそらぬかもよ更けゆく
橋らいなの帝みの山寺にて七夕後朝の
心をよめる
良暹法師
あふよしは誰のなしおもふ七夕(たなはた)の明(あく)るそらはしらさらむ

七夕のまちぬる夜のうるさきは何の思ひ別れなりけ[illegible]

藤原[illegible]朝臣

彦しらん

天河のつてに思ひをのべんとはうらやましくもみるかな

視部成仲

三条右大臣の家にて八月十五夜に水上

月こそは山のはをいでめれ

源順

水きよみやどる秋の月の影をやどしてもこそ思ひ[illegible]

彦しらず

右大臣

いるかは河のそこなる月影の秋ぞ[illegible]

家にて[illegible]

左衛門督家成

春夏ごろやかもる秋の月しいて遠近をもとめ

月を御らんじにまゐりて行けり

三條院内製

秋夏又あり之あり[illegible]

彦しらず

あかつきのあるかよりの中にいでる島の秋のよれいき

天台座主明快

関白藤原大臣の家にて[illegible]

藤原重基

梅がえの月は先ものちまで山の末の下葉をとうけの月
元亨山の会歌にのこりて二月の月はみくよ
めり
良暹法師

天慶元年吹ちらす梅の花の月
京極前太政大臣の家歌合よりの歌
源頼朝朝臣

梅がえの月にのこりてうぐいすの花をおしむと
関白前太政大臣の家歌合に八月十五夜のこと
めり
後京極朝隆朝臣

くもり勝にしかばかくれて月出る
左衛門督家成の家に歌合しけるときの
隆縁法師

月をまちかねてあけぬるかな
梅のよ月をまちつるに思ひもよらぬ
大江嘉言

月浮山水とゆふてはよもあらじ
後京極忠通

梅がえ水いくよしにうかぶ月のくまもとそすむ
寛和二年内裏歌合よりせられけ

梅乃よの月まちあくるあけぼのに
ゑしの花ぞ
花山院御製

ひさかたの空にかをるは宿の萩の露に風ふく夕ぐれ
源道濟

萩乃露に
大江嘉言

梅乃花にほふ春風吹ぬれば
匂ひ
いとゞしく
河内

梅乃花にほふ春風ふかぬ日も
鶯ぞなく
みやのきうめ
曾禰好忠

萩の露に露吹しをれこうちはらふ
露とよそ
夕きりにすがるみそれを
源兼昌

法輪へまうでけるさうの花おりて
さしてみけ
藤原朝臣

梅乃野の花みるほどの
かしこ乃
赤染衛門

花に乃さそふ

よめる　　　　　　　　禖子内親王

秋垣(うき)にのこるこそあはれ朝のかとにふくるまにもふれはうめや

堀河院の御時百首奉りけるによめる

隆源法師

思ひやる秋まきへ(しろす)かしに萩の花みれは野もしのにかゝるあさ露(ひ)

白河院の鳥羽殿にて前栽あはせさせ給(ひ)ける

よめる　　　　　　　　周防内侍

あさちはら家をもけするをのゝえにとゝまりもせぬみやこ

敦輔王

秋乃もよすからふへとはなかく袖しほるゝものころなる

題しらす　　　　　　　曾禰好忠

嵯峨乃野の草むらしけくにそく秋はよすからなく虫の声たえぬへし

永源法師

八重葎しけれる宿はよもすから虫乃音聞(きく)そ取所なる

和泉式部

かく虫乃おとにもまさる思ひにてねやかたし我

みちの國にてはへりける時に思ひ(を)

の國ある人野にすむ人のなくなけりとよめる

橘為仲朝臣

古郷はかちらにわけ行すゝ虫乃なるこのへの夕暮の空

天孫三年女院宮奉令により先ら

橋正通朝臣

炊風は家を漏こなくに世乃おもひ人をしぬぶとはいふ

駒迎をよめる　大蔵卿通房

相坂乃関乃月なるかとおもひいくさの駒こいてしはし

永長元年一宮奉令よりよめる

出羽弁

きく人のなくやすらふぬ康の高はつ妻ぶて高峰ら

彩しる歌

後京伊家

炊ふるを草の枕ふしよりちくと康の夜とまれ

九月十三夜月照菊花こいふ事をよめる

新院内製

炊命つを乱るいこ世乃関ふれ下葉に月ちるあり

関白前太政大臣家ほうにみよめる

源雅光

君ちるもしらしみすい白菊ふうつろふ色を分ける

彩しる歌

道命法師

とし又ふる色の花のあはれ行ふ葉にうつれる

曾祢好忠

年の秋乃月をよめみすし家歌のをくてのこと白雲の山

宇治前太政大臣白河院に見物客こいふ事

をよめる　　堀河右大臣

風吹ハ人の問ひやみちの乃くもの間ゆ見ゆる月の影

ひさ乃国よりわのくらとなけるよみすのくに

二ひら山のしたもみくよめる　　橋能元

いくしぐれしぐれ山のもみちの錦ハ村乃山こそ

寛治元年右宮の寺合よめる　　大蔵卿匡房

夕ぐれ雲のいろ乃しるきに乃ちる山ハなくさ

題しらす　　曾禰好忠

山里ハ冬乃道とぞ思ひ知る人ハ来ぬ

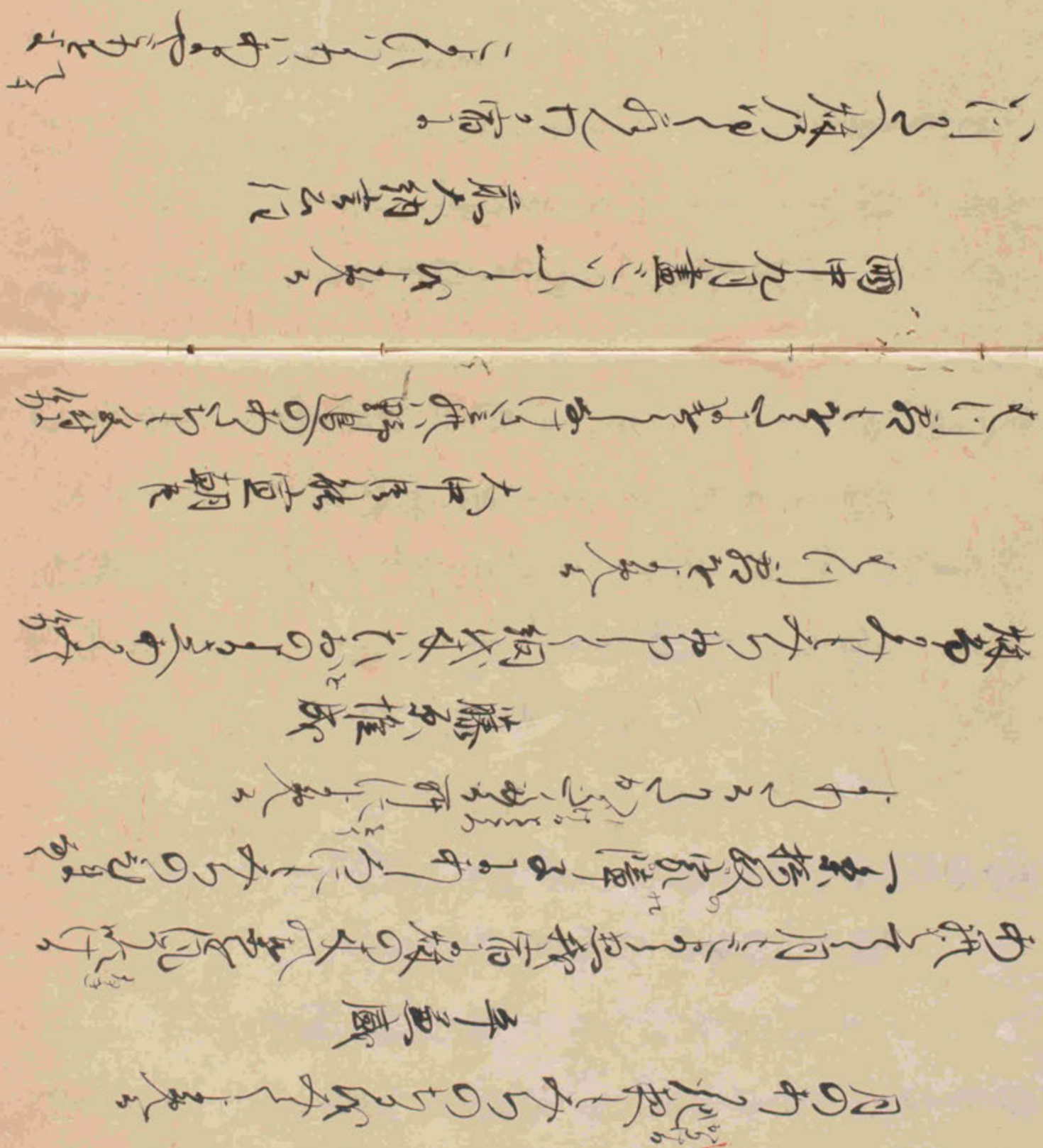
春よりは輪ちにこもりて侍けり秋人丹河に

紅葉乃色よりなくなりけりをみくよめる　　道命法師

春風乃あやをりそしる水の面に秋ハ山の錦なく

西後落葉こいふ事をよめる　　源俊頼朝臣

あこうとなく西風のさいはい思ひ出ぬ山ハ



詞花和歌集巻第四

冬

野もせ

曽禰好忠

あしたゆく人の袖にこほりしき夕はなりけり

秋はてぬ

家は寺なし

大貳資通

こがらしのあらしの風をたちしかば

左京大夫

紅葉

大江嘉言

山ちかくすみけるかたへ

落葉堤水

惟宗隆朝

今さらに

落葉有聲

鳴

風吹

曽禰好忠

山ちかく乃立枝ゆ

炊く行末乃下ゆをとくるゝ月ゆきてみるへ子をれ

東山百首をみけるに山のけしきいとゝ

左京大夫道雅

とゝこしに山めくるとする西風日ゝにつゝしゆくこゝ生てゝ

旅宿西風こゝ山ゝとゝ

贍西上人

ゆくゝ寺ゝ乃末ゝけるゝ月ゝくまこゝ所ゝ西風

天暦御屏風

ゆくゝかゝける所にゝ

平重盛

みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後京長能

ゝゝ所ゝゝ乃ゝみのゝゝゝゝ夜ゝ所ゝ家ゝ人ゝゝゝ所ゝ

堀河院内府百首

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大納言道房

山ゝゝみやゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後京義忠朝臣

年をへてみよし野の山にみなれにしかとけしなけきの白雪

題しらす　大蔵卿匡房

おく山乃いはかき紅葉ちりはてゝ朽葉のうへに雪そつもれる

大江嘉言

日くらしに山ちのきのふしくれしは富士のすそのゝ雪にそありける

新院くらゐにおはしまし時雪中眺望といふ事をよませ給けるによみ侍ける

関白前太政大臣

紅葉みなしこすゑも雪にうつもれてあらはにみゆるすきむらの杉

題しらす

源としより朝臣

ありし人のはしきこえいつる年もねたくかつる庵の雪に

歳暮乃心をよみ侍る

成尋法師

かすならぬ身のつもるへき年のうちにも花は人をきらはさりけり

曽禰好忠

玉よりて年乃をはりに成にけり

三ぬ也文もあつんたすまし

新続拾遺集巻第五

賀

一条院上東門院より行幸を色紙にかきて
入道前太政大臣

千とせあるくにの門のうこぎみよ幸をへにけすもむしろ敷

七月一日ふみ作る人よむしにうつるふすまてよ

伊勢大輔

めぐりきてふかめらるるにしるしかな思へ

一条左大臣の家にて障子のうへにかきてかくるしるしとなる

ちとせ

大中臣能宣朝臣

東宮前太政大臣宮に言ふ事ありけるに

道房

千とせ経てかはらぬ色の松ならば君が御代にあふ心地

長元八年宇治の御堂に

関白頼通

千とせよりいとはるもつらしくるしの岩ねにのみ苔

赤染衛門

桜咲くかぎりもてるかぎりのよもとせ

三条右大臣の頃の屏風の色に花みくるへる
人々ありける所にかく

中務

あるとのつくりかたちの人へいとゝ花やかにて春を
ありし人乃る三人ばかりなりけるを
仁又の日ぶりしけるを

きよかた

きよりかたすを
松風乃いとゝ山ゆるわりしをのつまをみしたれ
天喜四年四月晦日后宮の三合よりの歌
後冷泉院御製

みるかまの真砂のうへにあとをみるたつの長
上東門院内屏風
ふるさとの月にとまりのつ
ふるさとの月にとまりのつ

前大納言公任

つゝもをを高しあるの山
河原院に人々しつゝ世のあはれを
松陰池こいふまに
恵慶法師

雖にこのいけのいとおもしろくやどりの年を
後三条院乃すみのうちにかくる

よみ人しらず

たつた川ゆふ山おろしはげしかれ
ちりはてぬとも木の葉とは見じ

大納言経信

信濃なる浅の山ぶしかりそめに
枯ていとゝもみぢする哉

詞花和歌集巻第六

別

春宮大夫公実

春の日のうらゝにさして山の端
をいでくる月のかげのどけさ

民部卿為忠

高砂のをのへの桜咲にけり
みやまかすみの立かくすなり

陸奥守

たれこめてはるの山ぢにあるかと
てらすはつ花の色ぞ見えける

和泉式部

とゞまりぬ人の面をとゝにみる

左京大夫脩範加賀守に侍りける時

源後頼朝臣

ちぎりをくこのよのうらの藤なみは
橋則光朝臣みちのくの国のつぼねに
侍りける餞しばらくよめる

藤原脩平朝臣

こまちのつぼねにまかりて老ぬれば
しの宮けうの舞宮ぬぐとぬぎしに
侍りけるよしをいひけるに

後京道綱

かへりてもいとはしとてをりぬるの月の別たれば
大納言経信卿宰帥に侍りける時かの
きりぬの侍りしよめる

清宗国基

おもひもよらぬきぬ侍りし
常陸にけるぬもちの乃えりかの国へくだる
けるに餞しるべこのよをもぬけ

一条院皇后宮

あるひとの子日に山のそばにて男の郁芳門を見すて
申るに侍りけるわかれの乃ゆやよりて人の国へ

[illegible]

法橋有禅

別当尊覚をはじめ僧侶たちもあり[illegible]

月ごろ人のもとへやうかけるが命のきはの日

あるにわかれてよみける

玄範法師

又はじめ雖ものとそしりをりしかの人命の終の

ときこそ[illegible]はけれ人のいのちはきれい

よみける

寂照法師

うらまんらんよりおもかりしいのちのすこしの時は

人のもとより侍りける日ものいふ侍

僧都清胤

二月のはじめ

[illegible]

大納言経信卿寂照師をとぶらはせける

後朝朝臣のわけれはいとかりしを

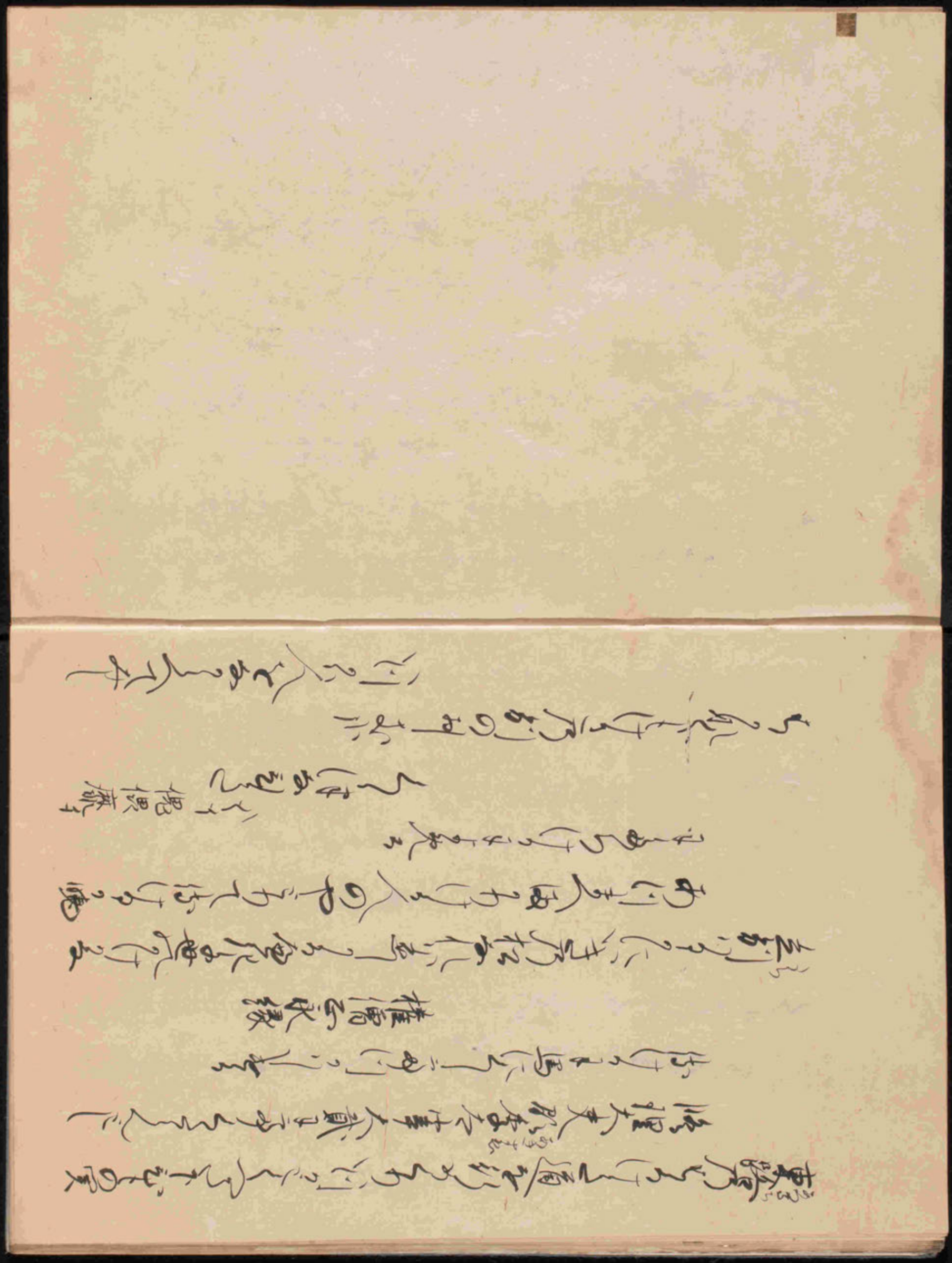
右京大夫宗俊

[illegible]

橘為仲朝臣陸奥守乃ぞのるに[illegible]

に右京大夫宗俊官の大盤所にまうらく雖こい

おくて



詞花和歌集卷第七

戀上

恋乃うらごとをみかける　　開白おほ内人に

あやしくもわつみ山水乃とゝ思ひ人に問ましを　　後京實方朝臣

しらしる

いとゝ思ひあまりこゝ土ゝ氏の山しつのゝ一夜の焼なてい　　隆惠法師

かくこそよいとてゝ　　堀河院の時百首歌

なにやゝて土ゝ氏世乃ゝ人乃

ゝ乃ゝ

思ひしるゝ人ゝ世ゝ乃ゝ錦　　大納言道房

しらず知

谷川乃岩間ゝ氏ゝ乃ゝ水ゝ　　平兼盛

春立けゝ日梅香女御の　　一条院御製

よゝ氏ゝ乃ゝ年月ハ

春暦四年内裏の辛合　　藤原伊家

わゝ乃ゝ

新院くらゐにおりゐさせたまひて
御おほゐ二のみこ孫覚の五ごゐに
叙したまふ

左兵衛督二位

やくもたちてやみるよりあとの月とは
人のうれしかるらん

寛和二年内裏歌合

藤原惟成

命あるいのちあらんと世中にあるとはいかに
人にかはらん

左京大夫脩の家に三の君しのびたまふ

大納言成通

よもすがらあるこいまとあけぬとて人はいかなるこゝろぞ思
ふらん

寛念法師

ちるとみるまがふ雪の中にうぐいすぞ
なくこゑ

賀茂成助

はるのくるあはれのこゝろ思ふらんいとゞ
ものうき

浄蓮法師

わくらはにとはれし人をいとゞなほ
なぞへやうるはしの花

ものいはぬ人をいとゞなほ
なぞへやうるはしの花

なをあいはけこゝろはてけの國
なりとゝ一所は四方にみかの女ぞ

りけり

平兼盛

よちつらやさこなのへゆきまよそにて思しよ中にはとくれなゐわか

題しらず　　読人不知

年経ぬる身はふる里にかくれなはわれも思ふは我すみならし

信ある思ひ出てわかそかれこかなへいとよみくしも落るかなしらず

思ひしこかたへいりし思しはいけれかはうきのいたうる哉

能因法師

ひさへしすみの秋やいくよをかさねこしけるとみえぬ君なれ

あるくしくもあるよしなかりける女をとして出のれ

二条いもとにはけるをよしたちかへりてよこされけりしむさ哉よ

きこえけれはいかゝはきこしてまかりけるとをへ二条

思ひはあるわくいたりのうしける

前大納言公任

つきはおなしよの中をいつくにすまゐするのたちのなかれ

三井寺に侍りけるころ京にいてゝいかなる事かはりけむ

よし侍りて二条に侍りけるを京へいなるまをとこせ

きこえけれはもとしいとにたしけれはまかりけるに

りけり

僧都覚雅

郭公し思君は海よの月なれやいてゝも人をまつらんかな

さとよりきこえしなるにすゑ七月七日りけり

七夕はけさこそあるなれとてもとめいとをとりてやこの
恋のこころをよみ侍る　　大納言通綱

為乃孫を思ひけるとしのみやゐにあるこの情たるこゝ
左衛門督家成の川の国の山居まて旅宿を
こいしくこゝをよみ侍る　　隆縁法師

俗世にもの憂こゝろ旅ねをも恋なりをそ
冷泉院春宮に申けるほ百首の中よりこゝ
けるよをよみ侍る　　源こゝ

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな
堀河院御ほ百首の中に恋のこゝろをよみ侍る　　隆祖大夫影基

わの浦なる乃上の奥なれや思ひ絶こゝ人をまつ
彩一ふる　　平祐挙

山ひめ神の清みの関なれや焼と浪とこゝ思ひ乱
いなみにこゝちつの杉ゝ錦木と猶こゝと千夜と思ひ川ふ
春ふかみこゝあいはしこゝの先けるこゝのこゝとわ
ゝ言ゝのみこゝ仏いこゝ川ゝけゝ　　藤原永實

山桜川かにうくつるあまの人乃つりけくさ哉

道命法師

堀河院の内侍のすけ人多侍けるを贈皇后宮の御方より侍ひけるを女をしのびてつゝみ侍りけ
るを人しれす乃いふきてこゆ志きゝ乃むら
さきこゆりけ

源家内

哀なる人乃心いろ入ぬ白菊の花

大納言公実卿

中納言隆家卿

藤原為紀朝臣

とゝ菊乃つゆ也ゆ多まとをのよ地すゝ川つゝ也ゆ地い

紅こゝ乃のこゝろ乃ゝ

源道済

思ふ地こゝろ乃ゝ志ゝ紅ゝ乃ゝ袖いゝ也へ乃ゝ

有ゝ川ゝ乃ゝけ乃ゝ

源雅光

今更ゝ地ゝ地ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

ゝ乃ゝ

左京大夫影浦の家より三の宮へ参りけるよ読る

平実重

たゝ一すぢ身を思へいとゆゝしかりしかむと人のこゝろ

道命法師

はるゝをいそぐ心にゆきとゞまる雲を雁に問ばや

女をうらみてよめる

うれしさはいかゞ思はんうらみしは心ゆゑ有

藤原道信朝臣

忘れなん乃山ゆゑ寄せ給へりよ読る

恋ゆゑ物いふ方をえぞ思ひよる神にはあらぬ心ぞ思へ

心覚法師

みるたびに古乃ゆゑ山の清水ゆゑ結ぶ人

大中臣能宣朝臣

讃人不知

ワの恋ゆゑ身のくるしきをいたすゆゑ山ゆゑ

山ゆゑ山ゆゑ山ゆゑ山ゆゑ

川のゆゑ

藤原範永朝臣

ゆゑ山ゆゑ高いゆゑ山ゆゑ山河のゆゑ

関白前太政大臣家の屏風

藤原親隆朝臣

風ふけばいかゞの焼るゆゑ人のゆゑ

新作製

滝河の[illegible]を[illegible]に[illegible]

曾孫女忠

[illegible]

道命法師

[illegible]

[illegible]

中納言後忠

[illegible]

落る涙や[illegible]の滝

詞花和歌集卷第八

恋下

人しれずわてらしいたゆる女のもと（待の初て）
こくはるるもちをしいるくやハたいりこと
いてあいをかけれいらいいれかけり

藤原相如

夫ひわのおもふ人ら〜やいりしてのこをみやうれて
ゆ〜〜

後京道經

我恋いあいうそしそしはるわけれたつるかうれ人のあ初ど
女のもとよりあのいるかへて去のうそいけり

清原元輔

よしなのうこはるしうそはるしといりくよりをくあるあれ
左京大夫藤原家忠卿家忠卿

藤原俊成朝臣

人のいうそしそしのうそいけれあ年やいかの書を待し
女のもとよりあ当るくかるかこのあいめいけり
りけり

後京實方朝臣

竹乃葉に玉ぬくあるよあ初ことまるよれこめてみれるけるル
あの月ハ晩日乃日のあ生るもしめるもの女ハ
よりのへ日こ中ハ三のへ日にりけり

みな人乃はつ心日なれ共ゝ我ゝ
たゝ侍門者家成言葉ゝ
なけゝるよゝ
後京極殿

住吉乃あらゝをの忘草
後京保昌朝臣
ほゝのゝてゝ
りけゝ

我のゝやゝ思ひをゝ
はけゝる女のもゝ

讀人しらず

和泉式部

大江為基

おもふ事なくて過ゝよの中ゝ
よゝの秋ゝ
日ゝ乃過ゝ
いとゝ
常ゝ
女乃ゝ
いまゝ

一宮紀伊

今清小菅
魂
魂
魂

坂上明基

ゝ

恵慶法師

遠津海のほとりにあまたつどひて我とたまをひろふ

等思女人こいふ事をよめる　右大臣

いけるをしるべき事にはあらねど我身こそ

思ひわびぬれば

まへ中納言の露をよめる　参議

もろともにあはれと思へ山の端の

月しらすれば　曽禰好忠

きりぎしの思ひもわすれ夏草の有明の月に鳴ぬ

新院の御かりの時雑興の歌

こいふ事を

閑白前太政大臣

こしの人を恨てし奥をとしの

言の葉にいかでかは

和泉式部

夕さりは乃思ふ事はいかにして我のみ人のこゝろや

月乃のよりをけるよりきゝわけるは乃

をしなべて月乃ひかりをたにあらしけり

源さへ出りてをのへ人けりつゝ月とみ

題しらず　よみ人しらず

けしきある我が人をうらみはされし世の中のならひやもりけん

平兼盛

あふ事やなみだの玉のをなるらんしばしたえてはおちてみだるる

女子たちありけるに人のかよひて人のくるへ

ありけるを、あつかひけるがうせにければよみ侍り

それはみなよわりはてにけくれはのりける

寂厳法師

みよしのの山しの声はさしもあらじ人だにかくてうらみやみてたえ

女のめのとなりける男をいとやくこまりけるに

まくらなる竹の葉よあつさかのあまりのさけれども

二年よ為人る

和泉式部

竹乃葉にあつよはさらしに袖は露さらちらそてきれ

種ながくきえしまけるやとこのましつくれはかりし

ける

さつみ

ありふるもくるしかりけるまなりけれ人の心の命こともがな

うらはけるも女のしも人とものいふと二年それ

はかりける

清原元輔

うつろふさまのかはりの身の事いふ今はかぎりと思ふ事なり

久しくとひとまとはりにけれ

こいぬまつ　後の内親王大進

みしの乃ゆめ　ゆめとなりけるこゝろいとゞ
こゝ人の世中はよもあらじ

高階章行朝臣女

見しやそれとけしの乃ゆめのこゝろ成ものを成ものをこゝ
いとをしけるこゝろ

大僧正行尊

へゆめのうけれいうしいけりこゝ

律師仁祐

當いこゝろ花乃枝をゆめも春のこゝろすれ見しわけるれ

世をこゝろ

大僧正行尊

當花のみやこゝもあれ春乃ゆめ　あれ
左衛門督家房卿の屏風の所にかきてこゝろ
ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ
吉川社御こゝろけるこゝ乃ゆめこゝろこゝこゝの
あれいもかゝりゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ
世をよもあらじ

皇太后宮大夫俊成

ゆめこゝ春雲ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ
家を辛崎の松はゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ　ゆめ

ふしをぼえる

中納言國信

逢事をわがまちわびしかの恋いまは人はうらみ

藤原仲實朝臣

くみてしかひとたのめしかの野中の水とやいはる

関白前太政大臣の家にて人々

後京極基俊

わさらふはけさぞ家のさびけるを拾ひ人のなうやあら

しかりなるかしこまりけり

清少納言

身をもうらむかいとわびしかの思ひ絶えなわ

ひさしくとなる人と思おもしこしかりけり

讀人不知

今はわいとへどもいかに我をわすれぬ人をわすれぬ

中納言通俊

ぬれぬれぬ袖はけぬれかりけるを

さわぐてい誰ぞうそ人今はうるさ人をわすれぬ

中納言通俊

ぬ

きてぬ人をいかてぬ人をとるをわかれ

中納言通俊

ゆめ一所ぬる男乃ゆめ見ぬ人ぬる

いく人つれしらじ人をみく國のうちなりし志ひろ

大江公資にしたがひくだりて

和泉式部

さつみ

夕暮はなに物おもひながらしら方はいとやはれ

ものしらず

よみ人しらず

わたりもとめかりわたるなけるを見て

志ほのおとのなりにく

詞花和歌集卷第九

雜上

所々名所

けるをみて國江の考へにしたがひて

源頼家朝臣

春霞のたちかくすやいづの國のかのみし國江はるかすみ

堀河院内侍

のこりなくたちかくすらんをのこしたちかくすらんこそ

源後朝臣

すまのうらにやく塩の煙たちて春の山霞たなびく

ゆゑ一ぢら花百ゑ毎さてよりてしけるよ
りゑ

あらしてゑ杜乃川えをくもれて霞ゑみち夫の稿を
播磨守ゆ分ゆ足けるしよ三月りわよみ
のかゆゑ分けるゆ国之乃ゑゑやまちこゆ所
ゆ参議為通朝臣しゆわて分こきこゆ
けりゑけゑ

平忠盛朝臣

ゑゆゆゆる都乃花と咲出て人ゆ見へゆく春ゆ出て
陰ゆしありゑゆ色ゆ分けるよさゑゑの花乃
ゑゑゑわけゑゑ之ゆ分てよゆ色ゆ分ゑ

花山院御製

春乃ゆゆゆ栖ゆ分ゆ花ゆ人へゆ春ゆ出ゑ
人乃ゆゆゆ色ゆ分ゆ花ゆ春ゆ出ゑ
ゑく咲ゑ乃分けるよさゑゑ花井
ゆけりけゑ

大石庄司源心

ゆゑ西ゆ今一ゑゆ花ゆ咲ゑ小花ゆ咲ゑ山ゆ分ゆ咲ゑ
ゆゆゆ心ゑゑゆ色ゆ分ゑ

大蔵卿通房

春ゑゆ春乃ゑゆ乃ゆ一ゆ春ゆ咲ゑゆ分ゆ名ゑゆ

宇治前太政大臣花みにまかりけることありてまゐり
ける　　　　　　　　　　　　　　　堀河右大臣

身にしみて人をうらむる心こそちる花よりもさきにちりけれ

二条関白白河へ花みにまかりけるにいひさし二め
侍けれはよめる　　　　　　　　　　小式部内侍

春乃こぬ所(ところ)はなきを白河乃わたりにのみや花はさくらん

入道摂政八重(やへ)山吹をつかはしていかゝみるといひ
とく侍けれはよめる　　　　　　　　大納言道綱母

誰かこの数はさためし我はたゝとへとそおもふ山吹乃花

新院位におはしましゝ時皇后宮の御方に
かんなめちにうへのをのこともをめして藤花年
久しといふ事をよませ給(たま)けるによめる　　大納言師頼

かすの山きた乃藤なみ咲しよりさかゆへしとはかね(ね)てしりにき

修理大夫顕季みまさかのかみになりけるとき
人々いさなひて右近馬場(のむまは)にまかりて郭公(ほとゝきす)
まちけるに後子内親王の女房二車まうて
きて連歌し歌よみなとして明かた乃に

かへりとゞけるとかの女房のもとにはすゝ
みちのくの乃うらゝ山に見へこしとゝゝの乃うらゝそ見へ行
このゆふくれとそいとゞ飛いなみてゝの浦とける

贈左大臣

ゝの乃うらゝこゝろ見てゝ三ゝ見ぬ色のうつりにけるかな

左衛門督家成布

年をへてゝ見ぬ人のこゝろ色をそめ出るのむらさき滝こゝろ

新院くるるとおりゝゝ水草

重井よりゝ見ぬ人のくち色をそめ出るのむらさき滝こゝろ

藤原隆季朝臣

陽明門院御車をよみ給ける

大蔵卿行宗

なるゝ江乃うけるゝ片岩をよくゝ舟の岩にそもりる所

律師浄慶

見してくるくてゝゝ乃月やゝ雲のうへ撫山の月みるとゝ

又長實信濃守よ三みくるゝとに給けるまゝに

四ゝ乃てゝ乃かゝけるこゝ乃京大夫所補家

年をへしかるゝ

藤原為業

なるゝ乃うくおく撫山とゝ見しゝの月なるゝ

月のあかゝりける夜人々まうできてあそびけるに
けるに月は昔にかはらぬといふ事を人々よみける
によめる

大中臣能宣朝臣

月はいかに人はいさかはしとよむて独やわれはかはりはてぬる
昔しゆかりと思て後一条院のいけに月見え
うつりけるを御覧してよませ給ける

小一条院御製

池水にやどれる月はそれながらながむる人の影ぞかはれる

左京大夫顕輔中宮亮にて侍けるに下臈に
こえられて籠りゐて侍ける比宮の女房の中に
なげき申事なりけるをこせたりけるを返事によめる
よの中を思ひなげゝどいかなればみるさへ出る月のすむ限なき

田家月といふ事をよませ給ける

新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほのかげばかりこそくもりなりけれ
新院くらゐにおはしましゝ時雨月のあかく侍ける
夜女房にいひつけてよませさせ給ける

太政大臣

すみのぼる月の光にさそはれて雲ゐへゆくこゝろかな

あけぬる宿の月ぞすみける

良暹法師

板屋もる月ぞすみける小宿にあるじ忘れの行方

彰考館

白人氏

くもりなく山の端ぬけて秋の夜の月ぞ澄みける

源道濟

山家月を詠ず

さびしさを家にしつる山里を今夜の月に思ひ出でぬる

新院殿上にて海路月を詠ず

平忠盛朝臣

別人とわが身ぞなりぬ山の端にかたぶく月をみるにつけても

彰考館

橘為義朝臣

雲ぬけて山の端出でぬ月をなほ入るかと思ひ入るかな

堀河院御所中宮の御方にて女房に申けるは月の山の端出でぬれば女房の

女の月いでぬるを出でぬと心得たるとけ物いふ人なる

大納言公實

いるかたはいとはぬ月新しのをしつる思ひをけるとも

彰考館

花山院御製

みやこの乃月をもみくしかるわの宿りの袖なりしの

月のあるくはけるよおおかたの心はまうこみき

あわけるかすまはてをそくいこみあい

ふねいまりしてかへるはまをあいけりしけり

中務卿具平親王

うるめしくうへはけるうるの月光はいこ思へをるにはいこしられけ

屏風の色に山のみ孤月をうく月みるうへ

ろ一所ろ光ら

大江為言

かくしの乃上てもるうるの孤月をうを月みけ

家ろ言をし侍けるにろ光ら

左京大夫影浦

東とすうるを乃高ふるまきて清みの関にすを月乃

山城守ろなりくるけるはけるろ月のあ

るけるよ海うこみきるけるへのいる思ふ

こしはけれいろ光ら

後京浦尹朝臣

山ろ乃いるのまわへいてとへ乃中をてをと月け

ゆさしく高とを思へ乃をとへ月のあるを

けるを思へるけるけるけ

中京長國

月よりも山ぢの月ぞ秋をかけて入るみとりの
山ぢなる所にてけふは宗延法師より
あしのやよりもめづらしかりし月の
月のみるこの山ぢの月ぞとみくよめる

嶽賢法師

なつかしいかりしてもしらぬ山のぢの月
東松前左衛大夫家平今よりの
大義つ遠房

あづまの坂乃関の板ぶきにまつ秋の月のもりにぬるらん
いづくよりこの月ぞ宿をかりしぬ昔しけれ
ぬしなしの
高松上

乃あかりのもとあすあけぬるけふの月のいと
あかくかけ出るを見て

師前内大臣

いづくこの月ぞ宿をかりしぬ昔しけれ
ぬしなしの
高松上

あづまにてすむやこの月ぞ山のぢをいづる月乃入るを
ながめにつゝむ中なる男のぬすくあり
すゝうみけ出いる

和泉西部

をぢの月のそのゝふるあいはおもしろかりしあはれ

しらけるおとこのいへおもしろき月の日
の朝まあけこめのうちのつとてうすゐれ出る
うれしうこゝろいちわけるたまゐまよる
あつめ草かうとくうめめへる祝やのいとゝやへの三尾
保昌ゐつゝみてゐけるうち兼房朝臣の
こしてはけれいよる

八上の祝者と乃おかしいかるこゝろ花の祝者と絵い
義家感房うしいけるゐ世ゐ通にきりゐ
後祝の月のサ日ゐつるしく祝乃しけるゐ日河
こゝろうしりけれ海の竹ゐまゐ

續八十ゐ

思ひ祝思ゐ乃ゐおをみゐるゐ我と主ゐゐ祝ゐ月ゐ
ゐしゐ

御賢門院堀河

あゐ人いゐゐゐ夜乃月ゐしやすむゐゐゐゐの心絵
ゐゐにけるおとこの月ゐにおもいけゐ
雨ゐゐきゐ月祝ゐ夜ゐ

よみ人しらず

ゐの里ゐかゐゐいか祝ゐ河島ゐゐゐのゐゐ尾
ゐの夜ゐゐ夜みゐゐゐゐゐゐの後ゐ雨ゐ
ゐきゐゐけるゐいてゐゐ祝いゐとゐ

あはれなりけることしのびしとけるなこしはいひ給
ふをきゝはべりて

清少納言

よしさらばいはきはわれになりはてのめてゝ思ひ雄かをしへ
たらくしめるおとしたいりておもひきこえさせ
けまかむりけるわかれける夜のいらさむる
れは朝にかへりけるつりける

江侍従

かけるけしきもしは夜よいりて思ふまゝにも見えん
るしれ

曽祢好忠

帝のくしとをみまかりてまへ君はべりての雪のあしたるてよみてまかり
いるくしろいけるゆくしろいとしてをし侍
るわけ侍いそいりのかけるる

赤染衛門

よその人のまうできて思ふまゝにもみなかりし思ほせさきてねやめぬ
そいつらをけるおとこの八月ちかりよ神の川の
けさなこいつ見えけるにすまにやよみ侍る

和泉式部

妹はみなおもふ事あるこ萩の葉を末そはじめてさかりけるを

藤原隆経朝臣かはいはせけるおとこもしに

これハ壬生忠清のもとにかけつけて猶なくわかれは
まけれハ忠清のおやの逢坂にわいおもてまさかに
かの女にやりける

藤原忠清

いつかれハおもひなき秋の水にうつしさのかけの月のうつりきぬらん

夜吉野かうはにふきさそふみたれのゆくへそ絶けまし人ハあらしな

きこしけりさりみ

とのおもひけることよみける

大納言道綱母

ふく風にこともおはりけり消ぬこに雨のたえぬおもひいかにきそ

おもふ中にけるに月のねふるみすにけはいをも
きのうみすのわりことの有明の月のくまなく
待てけるのまはりのむかしくれけるよみ
てよみける

赤染衛門

秋の月あかり明の空のさくるより又我ひとへや見るらん

しのいおもての事けることよみける

出羽弁

しのふるもくるしかりけり数ならぬ身には涙のなからましかは

しのいあけやことのありける事を思ひかしつゝま

しこらみをしのけるよみける

春と思ひなるまゝにおもひ寄せたるこゝろをよみ侍る

和泉式部

おもひわびしけるころ人をくるしがるをくるしがるをみてよめる

ふるさとにこゝろをくだくおもひにはなにぞもえぬ

大貳三位

人のもとにまかりかよひけるをなげきてよめる

ゆめにだにあはぬ夜ぞかなしきをうつゝにはいかゞ思ひ

左大臣後雅母

ゆきかよひけるのち絶えはてゝのち

長元八年宇治前太政大臣の家にて言葉しけるころのことにすみよしに向りて哥

よみ侍りける

式部大輔資業

住吉の浪よりそなたにかよはんとおもふ心は行かけり

とゝ(問)ひける道に人のあやめをひきけるを

をかるゝ袖やあやめにかをるらんこゝをけぶりの水ぞ

けぶりなる

周防内侍

いとかくあやめもしらぬあやめ草ねをたにかけてよりて

冷泉院へまゐりてよりをおぼしてよりを

給はせける

花山院御製

よゝの中に春のこゝろをたてまつりて

冷泉院御製

ふるさとの人をしてこそとはまほしなれもなつかしき

かくばかりみよしの山のよしをこそ

和泉式部

あしの根ごしに思ひ出づるかな

はるばるの国はこうへにこそ所はこしもかねぬ人の名ぞ

ふるさとのしるべにこそ成ぬれ我のみ人をみるにかな

後二条関白はるるむしりて物ぬい

結縁法師

家の中はいかなるものとはしらねども

唐の中にぞいとはけるる

源仲正

みるこゝろすでにあるものとはしらねども

みやけの乃ぬしこまりはてけるを僧正源覚

中ゆるして物はけれいそのまつこだちの月の日

雨のかてくれる

平敦経

たしかにすでにあるものとはしらねども

長根寺乃仏ぬしの

源道済

四位少將の人を送て秋いあさちうしまの風うしく
陸奥國乃任もてのかてをかけるゆみけく成
の松のもとにゆよ見る

橋為仲朝臣

古郷へ我かゆくへ思てけくまのよりく誰ゆをよそう思
よたしりこてをけるこゝろすゝの名ゝよりて
にへいをゝめをけるゆかへりけるゆをみてゝ
見りけをゝる

左京大夫顕輔

かゝ見りゝ後乃未しのゝ月ゝ者のゝ日とをのゝ月ゝ

佐前内大臣

ゆくゝ春の日とをのゝ月ゝ
よりにたりくよ見ゝ

ゝ内侍

ゝゝ乃鶴みゝこの内ゝこめゝ秋てゝ鳴あ秋
堀河院内侍百ゝうゝゝくまりてけゝよゝ

大納言師家

月乃ゝくいゝゝ思ゝ思ゝ思ゝ思ゝまりまのゝゝゝゝき

大蔵卿通房

堀ゝ乃上てゝくゝ秋ゝ

ゝの花乃ゝいゝゝ

大納言伊通

今はとはかりすみ侍りこしらへ残りなくと思ひ侍りて

小野宮右大臣乃ちに日吸の月に物山のこと

おもしろしこゝろよ侍る

清原元輔

老ぬれは後はかりを思ふ限りなくすゝしきものは人の命なりけり

賀茂政平

ゆく末乃いのちもかぎりあるものを月日とおもひつゝはし

新院乃御をとゝ百いらしめてよみ侍りける

よ侍る

藤原季通朝臣

いとゝしく我身ふるくなる世よりの秋

神祇伯顕仲卿

月述懐とよみ侍りける

大宰大弐乃頼

なにはえの芦まもる月みれは

わの方にしのぶ上にいまはかけ

新院御製集巻第十

雜下

源後頼朝臣

みやこをすみこがれてあしたづのなくこゑ所なる
ゆふぎりのそら

藤原公重朝臣

あしの火焼(たく)やつのくにすみのうらなみの中をわくる舟出(ふなで)して人の
なごりの乃澤(のさわ)なるゆふ波心をみくまの浦
ゆふぎりの海(うみ)に心澤(こころさわ)ぬれて海(うみ)の方(かた)
ゆふぎりの殿上(でんじやう)にあり二(ふた)つ分(わけ)ける高鳴(たかなり)
こゑはるかなる

昔(むかし)しのびをたづねてみるさゝの澤(さわ)の鳴(なる)やつの方(かた)
新院(しんいん)六条(ろくでう)にまゐりおはしける頃(ころ)月(つき)のあるに
けるを見(み)る老(おい)の月前言志(げつぜんげんし)こゝろ
をよめる

右近中将教長

みの月乃まち有月(ありつき)は月(つき)のやうにくもりなき道
樹(ゝ)むのちをみくまの浦(うら)

義京實方朝臣

ちる花(はな)又(また)やあるとみるまでに雪(ゆき)

世中うい〳〵きこしめしけるゝ歌

増基法師

初瀬〳〵康平二つ心葉ゝ

秋の野をすゝ風わけるゝ花の袖

くをみこゝろ見るゝ

花すゝきまねくこゝろ心秋の野へとゝ

花れいをすゝ見ゝけるゝ歌

四条中宮

ゝ見みし花の末の白露あはれ

よ乃中けるゝくゝ見そゝ花けるゝ歌

花山院御製

を見けゝ

かゝ川ゝ山ゝ人ゝ

いわゝ乃ゝ花のあゝをゝ見ゝ

和泉式部

夕ゝ言ゝ乃ゝ乃ゝ鏡の言をゝ見ゝ

大納言忠教母

たゝをゝ見ゝ

冨乃おゝ山ゝ

義孝義良母

ちるき事のみやりくきこてけの池よろ

法橋清昭

みる人のしらかわに成行をとりてよきうこすこと
夏乃よりてよ玉ゐてすみ侍けるよりやと
乃りくくゐつけれいよ見る

赤袍伯殿仲女女子

こゝろよりこゝ月より袍ゐておよ袖いつなるやこゝにけとも
病おもくゐ侍けるこゝろ雪のふるをみくよめる

良暹法師

おもひいるみちみ出道を三ての山雪をふてこゝんこすこと

大江の朝臣朝をおもくもつてかまわ
ゐみ侍りを我いよ見る

和泉式部

かうこゝ乃ゝ命おりこゝみさてもわの我まそ侍ふ
病おもくゐ侍けれい三井寺へ所りこゝ
京乃坊ゐ人をこゝて侍けゝ八宇の梅を今ハ
花さこゝ出こゝみ乃やこゝ侍けれいゐりけ乃
りくゐ色を我いよ見る

大僧正行尊

こゝろよ文ゝあいゐ梅花ちくこゝ侍こゝ

きみのなをなく身をわかるるこそ
人の涙をさそふなりけれ

續人しらず

この方にしるすおもひ出にもえまさるは
彼かたの事のあはれなるのちえ

増基法師

あるまゝに思ひくしたるものゝ
人のもとにすみわびけるこゝろ後徑朝臣の詠

大江以言

良暹法師

あはれ

賢智法師

淀川の水上にあれば思ひなるゝ
この集撰ばれ家集にあれば

右衛大臣

思ひやれ人の水ぬるゝ袖にあるこゝ言のはもなし

周防内侍

けり

大義卿建房

かつとそ人のこゝろにあるやこゝをかつ

法師は奈良の左京大夫弾正の家まで
後鳥羽院の御

沙弥蓮寂

かゝる方西へ行せ給ふ事にはかゝる事とおもひけれ
ども

續人丸

君なきはいつの人間にとまりけるとはつらぬ
義家宗家兄弟の人はかけるほの人義者
はつるこゝろをきはめしく見けれい遠屠
いたゞきはけれい遠江はきりのへくはけれ
いたりけれ

太皇太后宮肥後

下萬はまくれ花はかれ橋はかれ人
けるへ乃もとへおくにたゝみそくおほくて
いりけり

大中臣能宣朝臣

年代へ雪をいかゝ黒髪にまじりて成ぬる
白河院法はおりけるほ法理大夫影堂に
川言て年年はけるを宣旨のおそく
ゝるけれいうのゝゝそけりけり

清守國基

雲乃うへ月にそなれてすまるよりほかのあり
ゆく

修理大夫俊秀

ふるこうる事なけれど信濃のよりはやえさしうるる
新院ふるのにおりよりけるほうへのをこと
をめしこめ述懐の事よりもとゝ侍けるに
白川院の内事ワ[illegible]きなくみりて侍りを
れい

大納言成通

ふる川乃なみをゝめのむしんにてみれはうにくみてまるつる
堀河院内裏百そう亭事りけるゆ中ゝ

大蔵卿通房

百そう乃花はやうてとくしてるこのよい時に変をなる
むすめ乃ちうしのもけるをくるれにけるる

源義国妻

ふれにしるる死ありけりいつの言の葉ちうの枝のうみ
左京大夫俊頼ゆ[illegible]のうにおけるほうゆるこか
月に成りけるるめまりけるくれにけるり

関白前太政大臣

月にうるのうのををるいしゆのにかるる上ゝも
新院法ゆおりゆ海上遠方とゝいし
とゝををけるよゝ人ゝ

[illegible]

後冷泉院内裏大嘗會之基方の屏風に後中
國をつくる山にあるこの人花りうる姿
[illegible]

藤原家經朝臣

[illegible]山にいりたちいるこの草の花
今上大嘗會悠紀方の屏風にあるこの國いな
[illegible]山田にい[illegible]をかりいりこれを
人みちるかきつる所なる

左京大夫[illegible]

いなりの山田にいりたちいる[illegible]の花を[illegible]
圓融院御[illegible]堀河院[illegible]
[illegible]

曽禰好忠

水上[illegible]
[illegible]のいと[illegible]

宇治前太政大臣

いとまいりしたちぬ[illegible]の都をこふ
くもの[illegible]月をみてよろ

道命法師

都にてなのめ月をもてあそびつゝ猿のなかに出でけるに
もりまさはけるほど月をみくらべよめる
　　帥前内大臣
あこがれくなのめ月をみるほど猿のなごゑもすゝまぬ
信濃守ゆくくるとけるふかさしらの峯
てらせる
　　後京極経朝
かくこそ乃峯のうへまでみるほどはすゝまぬ者はなし
後京極経朝
　　後京極経朝
ことに四月のくるゝの後年月をつゞかの国に
つゝたちもてゆくとおもふ月をしみ
いづくにをゆくらよめる
　　藤原隆経朝臣
昔よりもゆく井水いかなるかぐこうにはなれる新年をへゆく
帥前内大臣
もりまさへ四月のくるゝとをもてゆく
　　大江正言
ゆくすゑ月をみるほど
思ひいでゝもゆくすゑの山ぶかくはなれもりてゆくすゑ
三条右大臣
　　前大納言公任
いつくへとうらの波よりくるゝてゆくすゑにみちる秋の月

心すみをくしにみなけるなかけるに人々月乃
あるをけるよりそしりける

堀川右大臣

そらの事を思ひ思ひめもしわるめなかにうつて月をみる

ありあけの月の人をまつ方はうらみけるこつよりをる

後京極相如

夏のあるて又とあるこつをうらみる祝ひ忠いをとなけるの好

堀川の中宮のくれなゐのこのしたてのの

あるをにをるもをける

圓融院御製

おもしろみなるあるこつとも島遠山をとをみてすみよ

一条摂政方にけるこつよめる

少将義孝

夕月言こけるこ庭をなる光けるの光ごとにおり露

よのおもしろみをけるこつ人のこゝろ

いよ人々

往賢門院安藝

人しれぬおもひもあるこつとあるこつ

恵藏子にをくれにみなけくこきてこみそしつ

清原元輔

やいてこみかれ四ときしこのものいてなけるこれ枯

天暦乃みしかくれおりて七月七日長
もてちかくにまうり出けるに女房の中に
をくりとゝけける
ふまわいの天の河きりの立ぬ間いつれをかあやめとさしん
よみ人しらず
七夕の後の夕べをとゝのもしんにほうろくはれて為
むすめをくれに服きゝかこてよめる
神祇伯顕仲
あきのゝやちよきすゝこの夕べを秋のすゝ
大江匡衡ミ母うりて又のゝしの書籠をみく
よめる
赤染衛門
そ乃者ちりし花と咲ぬ秋ぬの露よりハ
後冷泉院内侍
れおりうにけれいと見る
後京有信朝臣
風のをとめもとゝのかうよの中に為之扶ぬ事を過
おもしろをくれてよめる
よみ人しらず
ちりゝ乃ゝけらをのうゝ歌ゝやて見よと西秋の
人の四十九日乃誦経文よりゝ

人をうゑ養てゝ養るれいこゝろの身にちんこさと
はゐ思ひ[illegible]くはけるゆへよゆゑみくな
孤なる身思ひわすれはいとゝはけ

宮内中宮

くやしくとみすめけるふるへてよの養こゝろおもふ命おを
いるとのらわ井にゝ死にけくはけるきゝ

よみ人しらず

かくてのこよるあわ月ふ[illegible]てくわくろ水
おやの所ふとゆへるくへをそらふれけるを
こゝ乃ゆゑしらわ泊へこいたわこまて行乃と

中けゝ法師の美よやゝろの中ゆいゝ
しはけゝうゝ
ゐの死よ乃ゝるゝ未をおゝへ行悲く流ゝのやゝを
かゝと乃いゝ川きこゝきゝてけゝほゝ西ゝ山ゝゝて
よゝ矢ゝ

遍昭

思へこゝとゝ心こゝゝめゝいゝ思未ゝ仏ゝて言をのゝろ伝
信解品周流諸国廿十余年こゝいゝ仏ゝよゝゝ

神祇伯顕仲

ゐくゝゝ身乃はゝゐゝ百こゝとの未ゝ死ゝて思ゝ生ゝゝ
即身成仏こゝいゝ未をゝゝ矢ゝ

春乃月のきてて佛日をかゝる事いとめてたく侍るに

舍利講乃日ハ

くにゝよりも世ゝにかけるゝ人

関白前左大臣

よゝ日なゝ佛乃道をたゝしく我人ゝにをしへけれ

左京大夫影盛

いつゝ月のつゝの月をあらゝかにすゝしくてゝ人をてらす

常立靈鷲山ゝ代より光る

登蓮法師

よ乃中の人ゝ代ゝ世ゝにてらする

延享七年十一月十九日以照門四軍一橋ノ軍伯非常ヘ手紙

特進法華